

広島記念式典

70年、万感の初参列

広島が70回目の「原爆の日」を迎えた6日、本県の遺族代表者として伊藤陽子さん(73)＝浜松市南区＝が広島市の平和記念式典に初めて参列した。「安らかに休んで。二度とこんな犠牲が出ないように、みんなで頑張るから」。決意を胸に原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせた。

入市被爆の伊藤さん (浜松)



平和記念式典に参列し、原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせる伊藤陽子さん
＝6日午前9時25分ごろ、広島市の平和記念公園

語れなかった母に代わり

伊藤さんは広島県の安芸郡伴村(現広島市安佐南区)で生まれ、両親ら5人で暮らしていた。原爆投下の日、叔父が暮らす呉市にいたため、直接の被害は受けなかった。しかし、爆心地近くの陸軍司令部に召集されていた父親や、爆心地から約3キロの翠町に住む叔母の安否を確認するため、2日後、母親と入市し被災した。

た伊藤さんに当時の記憶はない。時を経て、母親から少しだけ話を聞いた。道路にむこうを向いて寝ているの。みんな聞こうとすると、母親は涙を浮かべ「話したくない」と口をつぐんだ。

自身も18歳で広島を離れると、被爆者への偏見が心配で、周囲に過去を語ることはほとんどなかった。20年ほど前に仕事の関係で浜松に移り、原爆の記憶

家族は皆無事だったが、街中はすさまじい惨状だった。3歳だった

はさらに薄れていった。しかし、母親が8年前、91歳で亡くなり原爆死没者名簿に記帳されると、意識に変化が芽生えた。「原爆の事実を知っている人がどんどん少なくなる」。2年前、静岡県内の被爆者団体に入り、原爆の被害を伝える活動に取り組み始めた。

初めて式典に参列し、「大勢の人の平和を思う気持ちに感動した」と思いは強まった。膝痛を抱えるが、今後もできる限り出ようと思っている。母が語れなかった原爆の悲惨さ、平和の尊さを胸に刻み、次代に託していくために。(社会部・尾原崇也)